第6章　おわりに

堤下遺跡は、地形上、沖積低地の一部に突出した小台地の東麓部に位置する。地形構成は、佐土原丘陵の南端に相当し縁辺部の一部が浸食されずに残存した形成している。周辺は、石崎川の流路に当たり現流路以外にも旧河道の凹地形が観察できる。地質は、基盤層が宮崎層群で形成され、上層は姶良火砕流堆積物で構成されている。

堤下遺跡直下の地層は、上部は火山灰質粘性土（灰白色～淡褐色～褐色の礫混じり）で、シラス台地からの崩積性の流入土砂とみられる。さらに下部は、粘性土層（漆黒色）が広がる。この粘性土層が堤下遺跡の主な包含層であり、表層堆積物である。

今回の調査で出土した周溝状遺構は、小台地上の東麓部に南北に２本走っている。一本は、台地先端の緩斜面から平坦部にかけて変化点直下のⅦ層流入土砂層に、もう一本も同土層面から台地先端の平坦部中央に掘り込まれている。周溝状遺構内に堆積した漆黒色の粘性土層内からは、弥生土器片が出土した。

遺物は、平坦部の粘性土層（漆黒色）内と周溝状遺構内から出土している。大半は、粘性土層内からの土器片である。この内、弥生土器は、周溝状遺構との関連から弥生期の生活用品、特に祭祀としての使用が推測される。また須恵器・土師器は、台地上東側緩斜面に存在する県指定広瀬村古墳18号との脈絡から同じく祭祀に伴う性格と考えられる。

自然科学分析上からは、周溝状遺構内堆積物を用いて植物珪酸体分析を行うと、埋没した当時は、ネザサ節などタケ亜科を主体としてススキ属やチガヤ属なども生育する草原的な環境であったと想定できる。同様に土器内の採集物を分析すると堆積当時は、遺跡周辺で稲作が行われ、何らかの作用で土器内にイネの植物珪酸体が混入したと推測される。蛍光Ｘ線分析においては、リン酸（ＰＯ）が高濃度で検出された場合は、動植物が土器で調理（煮炊き）された可能性が高い。そこで土器を４点分析すると、すべてにわたって低い値であった。従って、各土器での動植物調理（煮炊き）は、予想が立たない。

以上の調査結果から以下、堤下遺跡について整理する。

①堤下遺跡は、弥生期と古墳期の２時期に伴に祭祀が営まれていた。

②各時期の遺跡の性格は、周溝状遺構と遺物出土状況（リン酸値低い）から祭祀に関する生活跡と推測される。

③生活環境は、弥生期では遺跡周辺においては草原的な生育環境であったが、古墳期になると稲作が行われている。

宮崎県佐土原町文化財調査報告書第17集

堤下遺跡

1999年3月

編集・発行　宮崎県宮崎郡佐土原町教育委員会
〒880-0297　宮崎県宮崎郡佐土原町大字下田島20660番地
TEL 0985-73-1111

印　　刷　㈲池田印刷
〒880-0303　宮崎県宮崎郡佐土原町大字東上那珂17588-10
TEL 0985-74-0130